ハイスクールD×D平和を望む少年

雨男氏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハイスクールＤ×Ｄ平和を望む少年

【Ｎコード】
Ｎ９８９２Ｗ

【作者名】
雨男氏

【あらすじ】
ハイスクールＤ×Ｄに転生した少年は望んだ平和が手には入るのか？

プロローグ（前書き）

感想意見、誤字脱字ありましたらどうぞ

プロローグ

「始まりはいつも突然だった」

なーんてね！どうも、何か起きたら、知らない間に真っ白い部屋にいるんですけど何で？

確か俺はコンビニでジャン○を呼んでてその後、えーーーーーーーーーと何していたっけ？

「お前はコンビニで立ち読みした後、道を歩いていたらトラックに轢かれてその後、そのトラックの鉄骨の下敷きになって死んだのじゃ」

そうだ！！○ャンプ読んだ後家に帰っていたらトラックに轢かれたんだ！！

それでここはどこ？天国？いや俺そんないいことしてないから地獄？

「ほほほ。心配せんでもお前さんは天国にも地獄にも逝かん」

マジ！だったら俺生き返れんの？てかさっきから聞こえてくる声は誰だよ！

「今さらかい！！まあよいワシはお前達が呼ぶ神それもこの世界の最高神、創造神じゃ
ちなみにお前さんはこの世界では生き返れん、はっきり言うと別の世界に行ってもらう」

何で？てか俺どこにでもいる普通の高校男子だぞ何で転生？

「それは、まだお前が死ぬはずではなかったじゃ。それにお前の今の人生はあまりにも不憫だったからのー」

それで俺は行かない選択肢はないのか？

「ない！！！」

即答かよ！もういいさっさと送ってくれ

「なんじゃ？お約束の特典とかいらんのか？」

別に俺は普通に生きれればそれでいいし

「それじゃワシがつまらん！！特別にワシがお前の知識からいいの

を選んでやろう」

まて！！！それだと強くなって平和に暮らせんじゃねいか！！！！！！！！！！

「貴様の都合は知らんそれでは逝ってみよう」

絶対今の字違うぞ！！！

「いく所はハイスクールD×Dじゃガンバ」

そういった瞬間俺の意識が消えた。

起きたらそこは・・・（前書き）

原作に入るまで少しかかりますあしからず

起きたらそこは・・・

「どこだよここは？」

俺の意識が戻りあたりを見渡しとそこは、木木木木だ。

「どこかの森か？」

そんなことを思いもう一度あたりを見渡す。

やっぱり木しかないな。

「ん？」

周りを見ていると俺の体に違和感があった。普通にしゃべれてはいるが声が妙に高い、それに目線がいつもの半分ぐらいしかない。

「もしかして」

俺はある単純な結論に至ったそれは俺の体が小さくなっていることにそしてその予想は見事的中。

今の俺は大体４～５歳？ぐらいの子供になっている。

「確認は済みましたか？主」

不意に声がかけられた驚いて振り向くとさっきそこにいなかったはずの（ビジネススーツを着た）女性がいた。見た目は２０歳位だと思う顔は綺麗に整っているがその瞳には何も写していないただ鏡のように俺が映っている。身長は、高くモデルのようにすらっとして長い黒髪が風になびいていた。

何故に？スーツ？

「誰だ？」

俺はまず最初に一番疑問に思ったことを口にする。

「主が転生してきたときに一緒に送られた物です。私の役目は主の側に３６５日２４時間いることです」

ヤバイ。何かヤバイ。まさか特典の一発目がこんなんだとわ。ん？待てよ。

「君はさっき自分のことを者ではなく物と言ったということは、このハイスクールＤ×Ｄの世界で言う神器（セイクリッド・ギア）なのか？」

「そうです。私は生きた神器。自分で考え自分で戦うことが出来ます」

なるほど、だから彼女は物と言ったのか。

「ありがと次の質問なんだけど君はこの世界で言う神器の強さはどれくらいだ？」

「はい私の強さは、神滅具（ロンギヌス）の力を持つ神器と同等かそれ以上です」

彼女は表情を変えないまま言ったそれは俺のはるか予想を超えて。

「最後に君の名前を教えてくれ、それと、俺の特典についてもだ」

彼女は、小さく頷くと、どう見てもポケットに入らないだろうと言う袋と手紙が出てきた。最初に俺は手紙を受け取り読む。

『やーこの手紙を無事読んでると言うことは転生に成功したようじゃな。

それになんで体小さいかはのー、一度この世界に馴染ませないといけなかったからじゃちなみにお主の年齢は五歳程じゃ赤ちゃんだと何かと不便だと思うての一様、体の成長は自由に変えれるようになっておる。

種族は元人間の悪魔じゃからそのほうが何かと都合がいいかと思っての。

前置きが長くなったがお主の力についてこれから説明するぞ。

身体能力は高くしてある身体能力で上位の天使、堕天使、悪魔と対等に戦えるほどじゃちなみにお主には武の才能と殺人技能を与えたからの。

後、能力じゃがおぬしには直死の魔眼、蒼の魔道書、八握剣（やつかのつるぎ）を与えたからの力の使い方はお主の頭に直接入れたから理解できるはずじゃ。どれも神滅具並に強力じゃから使い方には気おつけるのじゃ。

直死の魔眼は何のリスクも為しに使えるから心配せんでよいぞ。

それにお主には魔力が全くないそのための魔道書なのじゃがな、武器はそこの袋に入っておる。お主、人身が武器なのじゃが役に立つと思い何個か送ったからの武器の説明は一番最初に触った者のみ自動で分かるようになっておるからの最後に彼女には名前がないからお主がつけてやってくれ。そしてこれを読んだら自動で前世の記憶が消えるからの一応この世界の知識に関しては残しておくからがんばるのジャー』

そう書いてあった手紙を呼んだ後彼女に視線を向ける。どうやら待っていてくれたようだじっと彼女の瞳が俺を捕らえている。

「この紙に書いているんだけど君に名前がないから今からつけようと思う何かいいのはない？」

「主が決めてくれるのでしたらなんでもいいです」

何でもそれが一番困るんだよなー俺ネーミングセンスないし。どうしよう。てか俺も前世の記憶消えたから名前ないじゃん。

そんなこんなで俺は名前を決めるのに３０分かかった。

「君の名前が決まった君の名前は、紅彩（くれなぎや）俺の名前は紅　零時（れいじ）」

「分かりました」

そういって彼女は小さく頷いた。その顔は微かではあるが微笑んだように感じれた。

名前は決まったけどこれからどうしよう。

俺はこれからの生活をどうするか全く考えていなかったのだ。

起きたらそこは・・・（後書き）

感想意見募集してます

魔王と遭遇

ひとまず俺は自分の力の確認に入った。

最初に肉体変更だ流石にこのままだと動きにくい。想像する自分の成長した姿を

そうすると自分の体が薄く光はじめ全身光に包まれると俺は姿を変えていた大体今の体の年齢は１８歳前後くらいだろう黒い着流しを着て長い黒髪が風で舞っている。

「何者かね君たちはここがグレモリー領だと分かった上での行動かね？」

いきなり声がし振り返るとそこには赤い髪の悪魔がいた。何故悪魔と分かるかと言うとこの世界の知識だろ大まかな世界の話や知識が分かる最もこれから先の未来は分からないが。

それにどうやら俺たちは赤い悪魔に不審者と思われたようだ。

「私達は怪しいものではないです。人間界で暮らしていたんですが悪魔だとばれてしまい退魔師達に殺されそうになったところを強制転移で逃げてきたんです。強制転移の為どこに飛ばされるか分から

ずここの飛んだだと思いますこちらから危害を加える気はありませんので安心してください。すぐにここの領地からも出ますので」

ナイス！！彩さすが俺の従者。

「それはすまなかった。こちらも色々といざこざに巻き込まれていてねそういえばまだ名のっていなかったねサーゼクス・ルシファー魔界では『紅髪の魔王（クリムゾン　サタン）』と呼ばれている」

「魔王様でしたか失礼しました私は紅彩そして主の紅零時です。あつかましいのですがもしよければ泊まれる場所に案内してもらえないでしょうか？」

あれ？もしかして俺空気？

「分かった同じ紅を名に持つものだ会ったのも何かの縁だろう私の家に招待しようではないか」

ヤバ完全に空気だ。それに俺無視で話決まっているし。

「よろしいのですか？どこの馬の骨かも分からぬものを招き入れても？」

「なに、困ったときはお互い様さそれに君達は面白そうだから」

そんな理由で止めていいのか？

「ありがとうございます。少しの間だけお世話になります」

そうして俺達は魔王さんの家にとめてもらうことにした。

居候（前書き）

主人公のフラグをどんどん零時は折っていきまーす。

それと早くも主人公最強化し始めました

少しの間こんな感じの話になります原作まではまだ先

居候

どうも零時です。
あの後サーゼクスさんの好意に甘えさせてもらい今、サーゼクスさんの実家にいます。

現在サーゼクスさんの実家に居候中です、ちなみにもうかれこれ三年ほど。いやー最初は二三日だけのはずだったんだけど居心地がよくて。

まーそんな感じで今、サーゼクスの妹のリアスと遊んでます。

しかし子供はかわいいですよねー年齢的には一緒なんだけどね。

そうそう、サーゼクスの実家にいるけど、あれから色々あって一様、蒼の魔道書と八握剣の禁手（バランス・ブレイカー）は身に着けることが出来た。

ただ、力が強大すぎて禁手になれない、直死の魔眼と身体能力で圧得していたそれと創造神から貰った道具には二丁拳銃と日本刀が合ったどちらも能力があり拳銃のほうは玉切れなしの氷属性が刀のほうが炎属性があった。

別に刀はおれ自身が刀だからいらないが一様使っている。

「ねー」

「なんだリアス？」

「零時は、好きな人がいるの？」

ゾク！！リアスがいった瞬間体に冷や汗が流れた現在俺の体には彩がいるそのためうっかりナンパなんかしようものなら軟禁がまっている、現に数回ありましたから。

「いないよ」

きっとこのとき俺の声は震えていたに違いない

「だったら将来私と結婚して」

グ！殺気が！前の日じゃないぞああ俺明日生きてかえれないは。だが俺は答えなければ子供の口約束だ

「いいよ」

そういった瞬間俺の意識はブラックアウトした。

Ｓｉｄｅリアス

三年前私の前に運命の人が現れた。あの人を見た瞬間私は恋に落ちた。

今日、私は、零時に告白した、零時は苦笑いをしながらだけど受け入れてくれた。

でも零時が返事をした後零時の従者が影から出てきて零時を連れ去っていった。

私には分かるあの人も零時のことが好きなんだって。

でも絶対負けないから。

居候（後書き）

意見募集、誤字脱字も

仲間

どうも零時です。あの後、一週間ほどの軟禁と言う名の監禁にあい何とか生きてかえってこれた。

いやー外の空気がこれほどうまく感じたことはなかった。

監・・軟禁にあった後は普通に冥界でまだ暮らしている。

サーゼクス（本人にそう呼べといわれた）から家を貰い今は一人暮らしを？まー彩を数に入れたら二人なんだけど。以外にサーゼクスに息子がいたのが一番の驚きだった。

そうそう、リアスだがもう少ししたら日本の学校に通うことになった。それとサーゼクスにリアスのことを頼まれたナゼ？後、プレゼントでサーゼクスから俺も悪魔の駒（イーヴィル ピース）を貰った、メンバーは今の所俺以外いない、え？彩？彩は神器だからノーカウントだよ。

ま、他にもリアスの眷属（悪魔の駒（イーヴィル ピース））が増えたりした。

メンバーとしては騎士(ナイト)に木場祐斗、戦車(ルーク)に搭城小猫、女王(クイーン)に姫島朱乃。
そして三人とも心に重い問題を抱えている木場は、どこかの研究所で聖剣の実験をさせられていて命からがら逃げていたところをリアスによって悪魔に転生それで聖剣を憎んでいるし、搭城も猫の妖怪それも猫又と呼ばれる上級妖怪で昔姉と一緒にいたらしいが姉が主の悪魔を殺してしまい妹である搭城にも飛び火が来たらしいホントのことを言うとこのことに関しては俺は直接、触れてないから知らないが一様出来る限り支えるつまりだ。
姫島は半堕天使で人間と堕天使との間に生まれた子供らしいそしてこの羽がいやでリアスに会い眷属になった最も羽は悪魔と堕天使両方が生えてしまったが。

こんな感じでなぜかリアスの眷属には色々と問題を抱えているものばかりだ。

あ、忘れていたがもう一人僧侶の眷属がいたコイツのことは・・・・ま、察してくれ。

ちなみに俺はリアスの眷属ではない何でも俺も一人の悪魔としてレーティングゲームに参加させたいらしく眷族にするともったいないというサーゼクスのわがままでこうなった、最もリアスは、納得がいかない顔をしていたがな。

そして現在俺は家で人間界に行くための準備をしているその理由

は簡単だ、悪魔の駒のメンバーを集めるつもりだからそのためリアスとは一緒に入学は出来ない、そのことで一日中文句を言われた。

文句を言われているときなぜかリアス以外に塔城と姫島がいた。

一様、彼女らも眷属になったためリアスについていくしな。

そんな感じで俺の仲間探しが始まった。

メンバーを探す最初に行くところは、ザ！京都！え！何でか理由は特にない気分？

そんな感じで京都に行ってきます！！

そうだ京都へ行こう！！（前書き）

今回は話が区切ってあります。あしからず

そうだ京都へ行こう！！

ザ・京都。

そんなワケで京都にやってきました。

イヤーさすが古きよき時代て言うの？いいね！古い建物とか特に。

「主、はしゃいでいるところ申し訳ありませんが先に用件を済ませてください」

「へいへい」

彩に文句を言われしぶしぶ仕事をする。今回気分で京都に着たんだけどついでと言わんばかりにサーゼクスに仕事を頼まれた、その内容が『京都に突如現れた謎の人物を捕らえろ』てことだ面倒な。

ま、サーゼクスに旅行費を出してもらっているから文句は言えないんだけどな。

「それで彩、俺はどうしたらいいんだ？」

「そうですね最初に京都にいることを挨拶しにいったほうがいいのではないのですか？」

「じゃ挨拶をしに行くか・・・・・・・・・・・それと出てきたらどうだ」

俺は誰もいない神社の柱に声をかける、普通に見れば『なに言ってんの？』みたいな目線が来るだろうが俺は、そこに誰かいることを確信が持てた、これも殺人技能のおかげだ気配や殺気を探るのは、お手のもだ。

「ばれましたか」

俺が声をかけた柱から人影が現れる見た目は人だ、だが感じる。コイツ妖怪か、柱から現れた人物は妖気を隠すそぶりを見せず俺に近づいてくる。

「何者ですか？主に危害を加えるなら手加減しませんよ」

「おー怖い、怖い」

柱から出てきた人物は彩の殺気に少し驚くがすぐ冗談で挑発する、だがそんなことに乗るほど彩もバカじゃない。

「お前は何者だ、俺達になんのようだ？」

「これは失礼した我は鵺、貴殿らが探しているものだ」

あっけからんと俺の問いに答えて鵺、まさか俺達の目的に人物が自ら来るとはそれに向こうは俺達のことを知っているみたいだし。

「お前の目的はなんだ？鵺？」

「目的？簡単だ貴殿に用があった。あの魔王殿が認めた人物だ興味を示さんほうが可笑しいだろう」

なるほど読めてきたぞサーゼクス

「そう言うことか、俺達が京都に来ることを知ってお前はサーゼクスに頼み自分を探すように言ったわけか、だがなんだ？お前の目的は？」

「全く貴殿も鈍いのさっきから言っておるではないか！貴殿に興味があるそれだけだ、それに貴殿は、今自分の眷属を探しておるのだろうちょうどよいではないか！我に力を示せ！！貴殿がわが王としてふさわしければ貴殿の物になってやろう！！」

はー何でこんな厄介ごとが多いんだただ俺は京都でゆっくり平和に観光したかったのに。

仕方ない。俺は手で彩に下がるように指示を出し鵺に向かって刃を突き出した。

「・・・・覚悟しろよ鵺」

そう言って俺は戦闘を開始する。

ＳｉｄｅＯｕｔ

Ｓｉｄｅ鵺

「・・・・覚悟しろよ鵺」

そういった瞬間、男の雰囲気が変わった。

最初は魔王殿に頼まれ仕方なしにこの男を見ていた。だが今は違う
今は純粋な興味、初めてだった自分が誰かに恐怖をするのがいつも
与える側だったのに今目の前にいるものは違った。

自然に笑みがこぼれるいつ以来だろうかこんなに戦闘で興奮する
のは。

ＳｉｄｅＯｕｔ

Ｓｉｄｅ三人称

キーン・カン・キーン

互いの刃が火花を散らし交わる。

零時は刀で鵺は二対の短刀で。

「ははっはははっは」　「・・・・・・・・・」

刃が交わるたびに鵺は歓喜の声を出すだが零時は反対に何も語らない己が刃が全てを語るように。

純粋な剣技では、零時が圧倒していただろうだが鵺は己が妖怪としての力妖術を使い零時を翻弄する。

鵺、サルの顔、タヌキの胴体、トラの手足を持ち、尾はヘビで文献によっては胴体については何も書かれなかったり、胴が虎で描かれることもある、このように鵺について明確に書かれたことはないそれが鵺の能力、対象者の意識を操り自由に幻覚を見せることが出来る。

零時も幻覚には気付いているだが、対処する方法がない。

刀で攻撃をするが致命傷は全て幻覚により外され明確なダメージを与えられない。

逆に鵺は思うがままに自分の攻撃を食らわせられる。

零時は、防戦一方になりついに均衡が破られた。

「そこそこ楽しめました貴殿は強かった、ただ我のほうが強かった
それだけです」

それだけ言い残すと零時に止めを刺す。

そうだ京都へ行こう！！２（前書き）

これで京都の話はおしまいです。

次回は、魔界に戻ります、たぶん・・・

そうだ京都へ行こう！！2

Ｓｉｄｅ三人称

「そこそこ楽しめました貴殿は強かった、ただ我のほうが強かったそれだけです」

その言葉とともに鵺は、零時にとどめを刺す。

だが結果は無残にも零時の胸に刀が届くことはなかった。

「鵺、あんたはよくがんばったなかなか強かったぜ。だが――――」

零時の言葉とともに零時は己が神器を発動させる。

「――――これで終わりだ」

ＳｉｄｅＯｕｔ

Ｓｉｄｅ鵺

「――――これで終わりだ」

その言葉と同時に奴は我に斬りかかった、だがさっきと刀が違う。

さっきまで使用していた炎の刀は、虚空に消え奴は、さっきと異なる刀を握っている。

一言で言えば無骨。

すぐに折れそうな程の細い刀。刀には、つばはなく、もつ所も白い布で巻かれているだけだ。

それだけの刀、それだけなのに我は押し負けている。

奴の力が上がったわけではない、自分が手加減しているわけではない、なのに奴の刀が我に届く。

それも的確に急所を突いてくる。

幻術が消された・・・・否、現にしっかりと幻術は発動している。

ナゼだナゼだナゼだナゼだナゼだナゼだーーーーーーーーーーーーーーーー！！

「分からないって顔しているな、特別に教えてやるこれが俺の神器の一つ八握剣だ、能力は、いたって簡単全てを斬るそれだけ、それだけに特化した剣(つるぎ)だ。」

その言葉とともに刀が振るわれ意識がゆっくりと薄れていった。だが自然と笑みがこぼれた。

ＳｉｄｅＯｕｔ

Ｓｉｄｅ零時

「おっと」

倒れるそうになる鵺を支える。さっきまで幻術でぼやけて見えていたが今は、はっきり見える、綺麗な白い髪にそれに負けず劣らずの美貌そんなことを思ってると後ろから声が掛かる。

「お疲れ様です、主。ですがナゼ最初から神器をお使いになられなかったのですか？」

「今回自分の身体能力を把握したかったんだ」

ま、ここまで追い込まれるとは思ってもいなかったけどな。それよりも・・・

「コイツどうしようか？」

そんなことを思いながら、俺達は今日泊まる旅館を探しに行った。

ＳｉｄｅＯｕｔ

Ｓｉｄｅ鵺

「ここは？」

「ここは京都のとある旅館だお偉いさんに挨拶に行ったらここを教えてくれたそれだけだ」

答えが返ってくることを期待していなかった、だが驚きはそこではない今しがた命を懸けて戦った者が目の前にいる。だが奴はなんでもないかのように我から視線を外した。それが酷く寂しく感じた。

「お前これからどうする？俺を知っていたってことは、俺の眷属になる気があるんだろうま決めるのはおまえ自身だ好きにしな」

そう奴は言い放つもちろん私の選択肢は決まっている。

「我は汝の矛となり楯となろう」

ＳｉｄｅＯｕｔ

Ｓｉｄｅ零時

「我は汝の矛となり楯となろう」

よし！これでひとまず眷属が一人増える実力も申し分ないしな。

「これからよろしくだ主様」

そう言って鵺が抱きついてきた。

そして抱きついた瞬間から彩が膨大な殺気を放って『殺す殺す殺す』てずっと言っているよ。

ま、家族が増えてよしとするか。

そう思い俺は彩をなだめることにした。

そうだ京都へ行こう！！２（後書き）

新しく零時の家族が増えました、何の駒にするかは今度のお楽しみです。

それでは次の話で会いましょう～～～～～～～～～～

プロフィール（前書き）

どうも。

そういえばキャラの紹介していなかったので紹介します。

鵺についてももう少ししたら更新します。

それと聴きたいのですがやっぱりリアスはイッセーとくっつけたほうがいいですか？

それについて何か意見どうぞ！！期間は一週間ぐらい？

その間も主人公の仲間探しの話は進めていきます。

プロフィール

名前　紅　零時　　くれない　れいじ

顔　　ブリーチの斬月と一護が融合したときの顔
　　髪の毛を腰まで伸ばしていて後ろでくくっている。

身長　１７５（通常時）

体重　平均よりやや痩せている

神器　蒼の魔道書
　　直死の魔眼
　　八握剣

能力解説

　蒼の魔道書、体外にある生命力や魔力を吸収し自らの魔力に変える変換率は無限で機能を止めるまで発動され続ける、発動中は体の回りに黒いオーラが放出され腕に黒い紋様が現れ、髪も白くなる。
　某対人ゲームと違い腕は義手でなく右腕に直接宿っており手の甲に小さく紋様がある。
　普段は皮手袋で片手だけ隠している。

　直視の魔眼、人や物の死の線が見える点は見えない。

　八握剣、全てを斬るをコンセプトにしており通常時は体の中にあり、使うときになると体から出てくる本数に制限はなく魔力がなくなるまで出せる。剣の形としては細い日本刀で柄の部分が包帯で巻

かれている

性格　めんどくさがりや、朴念仁、気配り上手、主夫

名前　紅　彩　　くれない　さや

身長　１８０

体重　秘密（本人曰く）

神器　？？？？？

性格　主命、主一筋、主の為ならなんでもする――――――――――

――――――――――――――――――――――

――――――――

槲、妖怪としての苦悩前編（前書き）

少し長くなったので二つに区切りました多分おかしな話になってますが気にしないでください

後、アンケート募集してます、リアスはイッセー、オリ主どっちもやってます意見どうぞ

現在イッセー3　オリ主1

鵺、妖怪としての苦悩前編

Ｓｉｄｅ零時

『テゥルゥリーン！！

零時の眷属が新たに増えた』

「何してるんですか主？」

え？何って某ゲームのスカウト音？多分？

「知らないのか鵺？」

「いえ」

マジ！ここでジェネレーションギャップがーー

「主、ふざけるのもいい加減にして魔界に戻りましょう。あの腐れ魔王を滅せねばなりませんから」

うわーーーー。いつの間に彩こんなに物騒になったんだ？

「最初からです、私の行動原理は主、主、主、の三つで出来ていますから」

すごいねーー。臆面もなくそんなことを言えるなんて後、心を平然と読むのはやめよう。

「そんなことより彩、鵺に駒としての役割をあげないとな」

「そうですね。彼女ならやっぱり騎士（ナイト）ですか？」

「確かに、彼女の剣技を考えればそうかもなでも、俺的には、戦車（ルーク）になって欲しいんだ」

「どうしてですか？」

「鵺と戦ったときに感じたんだが剣技はすごいが、力がなかったの

か剣に威力がなかった」

それに、無理やり幻術を戦闘にいれている気がしたしな。

「そうですか」

それだけ言って短く頷いてくれる。こういうとき物分りがいいとたすかるよ。

「そういうわけだから鵺君には戦車になってもらうよ」

「我が主が申されるのであれば我はそれに従うのみですから」

「ありがとう鵺」

そう言って優しく笑う、そうするとなぜか顔を赤らめる鵺。

「鵺、さっきから気になっていたんだが君の名前はなんなんだ？俺と戦ったときも名を名乗らなかったし？それにあったときからそうだったけど、どうして君の姿がぶれて見えるんだ？」

そう、これが一番不思議に思ったことだ。

最初は戦う為、隠しているのだと思ったが、気絶しているときも、姿がぶれて見えていた。

そのことを聞くと鵺が口を閉ざし空気が重くなった、俺はただ鵺が口を開くのを待った。

「主は、妖怪がどうやって生まれたかご存知ですか？」

沈黙から出たのはそんな短い言葉だった。

鵺、妖怪としての苦悩後編（前書き）

どうもこんにちはこれでひとまず鵺のお話は終わりです。

シリアスにしようと思いましたが、主人公に合わないと思いすこし軽めにしました。

そして恒例？のオリ主とイッセー、リアスをどっちに入れるかです。

現在

イッセー3　オリ主5となっています今週の木曜日を最後にしますのでよろしくお願いします。

鵺、妖怪としての苦悩後編

Ｓｉｄｅ鵺

「主は、妖怪がどうやって生まれたかご存知ですか？」

沈黙から出たのはそんな短い言葉だった。

「知らん！！！！！」

「え？」

我の答えにばっさりと主は斬る。

「お前がどんな存在でもお前はお前だ！それ以上でもそれ以下でもない！」

そんな風に主はこともなげに言って見せた。

我、鵺と呼ばれる妖怪に親はいないどこで生まれたのか、どうやって存在しているのか分からない。

それが我の鵺としての存在理由。

だが主はあっさりとそれを斬った。

「自分の存在理由が欲しいのなら俺がやろう。鵺！主が命じる、未来永劫我の楯となり剣となり我の側にいよ」

わがままな命令だずっと側にいろと。

「全く、主はわがままだな。こんな姿の我が良いのか？」

「姿なんか関係ない。俺がお前を欲しているだけだ！」

「分かった今ここにもう一度誓う我、鵺は未来永劫、紅零時（くれないれいじ）を主と認めともに未来を進むことを誓う」

誓い頭を下げる。

「よろしく夜」

「夜？それはなんですか？」

頭を上げ問う。

「お前が名がないといったからだ鵺は夜の鳥と書くだから夜それだけだ」

その後『単純な名だけどな』とつけたした。

初めてだった名を付けられたのはそして名で呼んでもらうのわ。

「私もよろしくね夜」

「ああ。よろしく頼む主、紅」

ＳｉｄｅＯｕｔ

Ｓｉｄｅ零時

「ああ。よろしく頼む主、紅。」

そういって鵺改め夜は微笑んだ。

「最後だ夜お前を俺の従者として悪魔に転生させる」

そういうと夜は黙って俺を見る。

「そこでだ！お前の姿を定着させる」

「え？」

「なに、簡単なことだ妖怪としての性（さが）なら、悪魔になれば多少は変えられはずだ」

「そんなこと出来るんですか？」

そう、普通は出来ない、だが神のいない今の世界なら出来る。

「問題ない少しズルをするが」

そういうと不思議そうに首をかしげる。

「俺の従者、紅。アイツの能力を使う。紅の能力（神器）は『ただ一つの記録（オンリー・メモリー）』を使うこれは、存在している概念を変える、これを使

い夜を転生させるときにもう一つ戦車の駒を使い元妖怪の鵺でなく悪魔の鵺として存在を定着させる。
鵺自体に使わないのは体が拒絶反応を起こす可能性があるからだ。
わかったか」

「？？？？？？？？？？？」

人と通り説明するが理解できないのか頭から煙を出しショート寸前の夜。

ま、試したほうが早いだろう。

俺は鵺の側にまで行き駒を二個取り出し、準備をする。

紅の力を借り一つの戦車の駒の概念を変える、そしてもう一つの駒を夜の前まで持ってくる。

「いくぞ」

俺の問いに小さく頷く夜。

俺は戦車の駒を一つ夜にささげる、淡い光とともに鵺に悪魔の羽が生える。

そして続けざまにもう一つの悪魔の鵺として存在を定着させる駒を使う。

もう一度、淡い光が集まるが、今度はさっきと違う。

今までみえなかった夜の姿が鮮明に見え出した。褐色の肌に、金色の瞳、黒に近い紫の髪。

そして、綺麗な顔。

んんんん！！！！！！！！！！！！

俺はある部分を見てあることに気付く

「お前女かーーーーーーーーーーーーー」

そんな叫びとともに夜の悪魔としての転生が終わった。

だが知らなかったこの光景を見ていた奴がいたことに。

槲、妖怪としての苦悩後編（後書き）

夜のプロフィールも後日出します。

補足

紅の能力は概念を変える能力ですが概念一つにつき一つ変えることが出来ます。

ちなみに概念であればなんでも変えることが出来ます。

あとオリジナルの神器も募集します、作者の貧困な頭をお救いください。

それではさようなら。

主はいつも死の危機？（前書き）

こんにちは、今回は、スピンオフです。

零時が彩に監禁、もとい軟禁されかけのお話です。

そして明日までになりましたリアスはオリ主、イッセイーどっち？

投票お待ちしています。

現在

オリ主８　イッセー５

投票してくれたかたは、ありがとうございます。

では次のお話で。

主はいつも死の危機？

「あのー彩俺は何でベットに括り付けられているんでしょうか？」

しかも鎖。

「主、私も本当はこんなことはしたくないんです」

ならするなよ。

「ですが、主があまりにも見境なく女の人を誘惑するので少しｏ☆ｈ☆ａ☆ｎ☆ａ☆ｓ☆ｉをしようと思いまして」

「待て！これのどこがお話だ！どう見ても何かする気満々だろうが！」

「いえ。男で言う拳で語り合うということです！テへ★」

は？何言ってんの？どう見てもワンサイドゲームじゃねいか！しかもテへ★じゃねーーーーーーーー

「まて。彩何があったんだ？話し合おう、本当に話し合おうじゃないと零時さん死んじゃうから！」

「ダメです」

ヘルプ！ヘルプ！彩さん目に光が灯ってないからーーーーーーーーーーー

ちょっこっちに来ないで死ぬ死ぬーーーーーー

ガチャ

ん？

「零時ー遊びに来たよ！」

おおーー我がメシアよ良くぞ来た。

俺を頼むどうか助けてくれ。

「何しているの？零時？」

「これはこれは、主に迷惑を掛けてばっかりの小娘、リアス様ではないですか」

ちょい待って！何、喧嘩売るようなこと言ってんの。

「どうも愚図従者」

そしてリアス、君も買うな！！

私の命がーーーーー

「なんですか？小娘様？これから私は主と楽しい会話をしないといけないんですけど？」

「会話？笑わせないで零時が嫌がっているじゃないそんなことも分からないの？」

にらみ合う二人そして・・・

ボソ

「貧乳小娘」　「逝かれ従者」

ブチ

あ。なにかすごい危険な音がしたよ。

そしてリアス、君は僕を救ってくれるんじゃなかったのか。

そんな俺の考えをよそに二人は喧嘩を始めた。

え！

俺、オンザベット。

現状縛りつけ（鎖）

あ。死んだ。

そんな俺のむなしい考えは、二人の喧嘩とともに綺麗に消えた。

文字どうり綺麗に。

喧嘩終了後

「主、では約束のｏ☆ｈ☆ａ☆ｎ☆ａ☆ｓ☆ｉをしましょう」

「ヘルプ、ヘルプーーーーーーーーーーーーーー」

「大丈夫ですいたいのは一瞬ですから」

「ヘルプ、ヘ『ガッ』バタ

「さてゆっくりと体にｏ☆ｈ☆ａ☆ｎ☆ａ☆ｓ☆ｉをしましょうか」

俺はこの後どうなったか知らない、聞きたくもないただ俺は自分の無事を感謝した。

主はいつも死の危機？（後書き）

無事帰宅？（前書き）

投票結果発表

オリ主９　イッセー５　よってリアスはオリ主のハーレムに行きます。

パチパチ！！

そして今回は、やっと零時は自分の家に戻ろうとします。

そして新たな敵しゅつげん？

無事帰宅？

Ｓｉｄｅ零時

「ここは？」

俺達は本来ならば転移魔方陣で自宅の前にいるはずだ。

だが現状は著しく異なっている。

自分の視界の中に家はなく、謎の不気味な城がある。

「夜、彩、いつでも動けるようにしておけ」

二人にいつでも動けるように声をかけ再度、あたりを観察する。

枯れ果てた大地、不気味な城、赤い空、全てが異形と呼べる場所に俺達はいる。

「ん？」

あたりを見ていると城の前に誰かが現れた。

夜と彩は警戒を強め城の前に現れた者を見据える。

「お待ちしておりました。私(わたくし)は、この城で従者をしている者です」

そう言って彼女は礼儀正しく頭を下げた。

「貴様の主とやらが我が主を呼び寄せたのか？」

夜は殺気を放ちながら城の従者に問う。

いやいやいや。確かにそれも気になりますよ夜。だけどさーもっと気になるところがあるでしょう。

「はいそうです」

「そうか」

え！それだけなんで彼女の格好を聞かないの？

まだ。百歩譲ってメイド服なら納得しよう。

だが！何で彼女はナース服なんだ！！しかもかなりにあっているし。

「主、気にすることはありません、よろしければ私、彩が着てあげますので（ニコ）」

何言ってくれてんの？誰もナース服が良いなんて言ってないしそもそも何でナース服を着ているか知りたいだけだし。

「はーもう良いよさっさといこうか」

「ではご案内します。ついてきてください」

そう言って歩くナース服の従者の後を俺達はついていく。

しかし、違和感がある。

俺は彼女を観察したが可笑しい彼女からは、生命の流れを感じない。

人も悪魔も天使も生きているそしてたとえ神器だろうと微量ながら生命の流がある、だが彼女にはそれがない。

それどころか魔力、気すらも無い、感じ無い、まるで最初から存在していないかのように。

また彼女の見た目にも気になる点が多い、死人のように白い肌、浮き出ていない血管、白髪がほとんどのくすんだ金髪。

そんな見た目に俺は一つの答えを自分で導き出した。

彼女は生きていない、そして死んでいない――――――――――

生きる死体『人造人間』

そう俺は答えを出した、そしてこの考えが俺の未来を左右することになるかも知れないことにまだ俺は気付くことはなかった。

館の主と従者（前書き）

今回ナースの存在が明らかのそして主、登場！！彼女の目的は？

館の主と従者

Ｓｉｄｅ零時

ナース服を着た奇妙なメイド？従者？に城の中を案内された俺達は、大広間のような所で城の主と対面している。

しかし面倒だ、ナゼ椅子がない？このまま立ちぱかよ！

「よく来た、歓迎する。私はこの城の主、ブラン・Ｗ・ノワール。道案内をしたのが私の従者だ」

そう言ってこの城の主ブランは自己紹介をしてきた。

ブラント名乗った奴の見た目は、まー普通に美人かな？美人と言うよりは美男子よりの顔に透き通った肌、銀色の短髪、青色の瞳そして俺が女だと分かった最大の理由それは！

服装だ、明らかに男を挑発するような格好をしている、白を主体とした服は、胸元は大きく開き頭を下げると胸が大きく揺れる。下に視線を移すと体のラインがはっきりと見えるぴちぴちのズボン。

男だったら泣いて喜ぶだろう、だが俺の両サイドには修羅と般若がいる。胸元を見た瞬間二人からほぼ同時に目潰しを喰らいかけたしな。

「知ってるようだが一様名乗っておこう。紅零時（くれないれいじ）だ。両サイドにい

るのが俺の従者、俺から向かって右が紅彩(くれさや)左にいるのが夜(よる)

礼儀にのっとり俺も返す。だが視線は逸らす、隣にいる修羅と般若に何をされるか分からないからな。

「まずは無理やりこの城に呼んだことを謝ろう」

そう言ってブランは頭を下げた。

「ああ、別にいいよ、で用件は？わざわざ俺達の転移用魔方陣に干渉までしてきたんだ、俺達を呼んだ理由を教えろ」

「そうだな、零時お前を呼んだのは他でもない私と私の従者を殺してくれるよう君に頼みたいんだ」

「は？」

まて、これは俺の聞き間違いか？

「突然のことで悪いと思うだがこれ以外私達が運命から逃れるすべはないんだ！頼む私達を殺してくれ！」

懇願、涙を流しながら目の前のブランは頭を下げる従者はそれに寄り添うように主の側による。

「悪いが理由を話してくれ突然そんなことを言われてもどうしようもないからな」

俺がそう言うとブランは小さく頷き自分のこと、自分の従者のことを話し始めた。

「私は、魔女だ。人の身でありながら強大な力を見に宿してしまった。そして滅びた魔女唯一の生き残りだ。

私はこれでも何世紀も生きている。その理由がこれだ」

そう言ってブランは自分の胸に手をやり何か呪文を唱えるそうするとブランの胸の周りが光ると同士に時計が出てきた。

時計は、ブランの胸より少し上に現れ今はブランの体と一つになって胸元の所にくっ付いている。時計はローマ数字で刻まれ小さいながらも神々しさを放っている。

「これは？」

俺は思わずブランに聞いてしまった、隣にいる俺の従者達も不思議そうにしている。

「これは私に宿っている神器、灰かぶり（シンデレラ）能力は時間を２４時間前に戻すこと。
そしてこの力は一日一回強制的に自分に効果が発動させられる、その所為で私はこの若若しい姿を保ったままだ。
もう嫌なんだ大切な人が死ぬのも、誰かに忘れられるのも、だから私を殺してくれ零時」

なるほどな。

「あんたの理由はわかった、だがブランあんたの従者はナゼ殺さなければいけない？」

「彼女も私と同じような理由だ。
はるか昔、まだここに城を構える前の頃だ、たまたま寄った国そこでは、酷い疫病がはやっていてな、私は問題なかったがそこに住んでいる人々をどんどん死んでいった、それを食い止める為私の従者の父があることを思いついた、それは元気な人間に病原菌を射ちそこからワクチンを作ろうとした、そこで実験台になったのが実の娘だったわけだ」

ギュ

その言葉を聞いた瞬間怒りが湧き上がる。

「いいのです、零時さん、村で唯一元気だったのが私だけでしたか

ら」

俺の表情を見て思ったのか彼女は苦々しく笑う。

「それでも結局ワクチンは作れませんでしたし」

え？

「じゃなんで君は今ここにいるんだ死んでいるだろう普通」

「そうですね結局ワクチンは作れませんでした」

『その段階では』と彼女はつけたして。

「その後、私にあることが施されましたそれがいま私が存在している理由です。

ワクチンが出来ず、自分の所為で娘の命を奪いかけている、そう思った父は私を――――――――

生きる死体『人造人間』になるよう施しました。

人造人間になった私は死ななくなり不老不死になりました、そして不老不死になった私を使い父は、ワクチンを作り村人を救いました。

その後は、不老不死になった私を気味悪がり恐怖した村人に追い出された時、主が拾ってくださいましたそして長い年月をえて今に至ります」

そして、最後に二人そろって俺に殺してくださいと言った。

館の主と従者（後書き）

どうも今回の話は自分の好きなマンガを参考にしました、まかぶったが気にしないそれでは火曜日に――――――――――――――――――――

決断！今、過去、未来、そして定め・・・・（前書き）

こんにちは、今回、魔女の思惑が分かります、次回の投稿はまだ紹介していない三人のプロフィールを書きます、その次にバトルに入ります、二人はもちろん眷属の仲間入り？ま、そんな感じですーーーーーーーーでは行ってみよう！！

決断！今、過去、未来、そして定め・・・・

Ｓｉｄｅ三人称

零時は、決断を迫られていた。

彼女達を救えるのは、零時だけだ、零時の神器（セイクリッド）、八握剣（やにぎつかのつるぎ）の能力で彼女、ブランを救えるらしい。

ブランの神器灰かぶり（セイクリット・ギア）（シンデレラ）は、自らの肉体と完全融合している為取り外すことは出来ず、例え無理に取り外しても灰かぶり（シンデレラ）で強制的に元に戻される。

そのため零時の神器（セイクリッド）、八握剣（やにぎつかのつるぎ）の能力である、ありとあらゆるモノを斬る能力が必要だそうだ、そして零時を見つけたのはたまたまで夜と戦っていたときのことを偶然水晶で見つけ今にいたる。

だが零時はある考えが浮かぶ彼女達が死を望んでいるのか？

偶然にしてはタイミングがいいことに？

色々な考えがめぐる、だが零時は一つの策とは呼べぬほどの無謀なことを言い出した。

「分かった。俺はお前達を殺そう。ただ！一つ条件がある俺達と戦ええそこで俺達が負けたならお前達の言い分を聞きお前達を殺す。だが！俺達が勝ったなら俺の条件を飲んでもらう！それでいいなら始めよう」

賭けとは呼べぬ賭け、だが零時は確信を持っていた彼女達が自分のこの話に乗ることを本能的に零時は分かっていた。

ＳｉｄｅＯｕｔ

Ｓｉｄｅブラン

「分かった。俺はお前達を殺そう。ただ！一つ条件がある俺達と戦ええそこで俺達が負けたならお前達の言い分を聞きお前達を殺す。だが！俺達が勝ったなら俺の条件を飲んでもらう！それでいいなら始めよう」

奴はそう言った。

別に奴が私を殺せるかなどたいして期待などしていなかった。

所詮は時間潰し奴を呼んだのも、無駄な芝居をしたのも全ては時間潰しだ、『永久(とわ)の魔女』と呼ばれ、どのくらいの時が過ぎたか、無限の時間があることはそれは時として幸せではない、ただ虚しさが残り退屈になる、退屈は毒だ私の心を蝕む毒だ、だから私は、ひと時の退屈しのぎをする。

「いいだろう受けてたとう、ただしこちらからも少し意見を出すがな」

それが逃げだとしても。

Ｓｉｄｅなぞのナース服？

「分かった。俺はお前達を殺そう。ただ！一つ条件がある俺達と戦ええそこで俺達が負けたならお前達の言い分を聞きお前達を殺す。だが！俺達が勝ったなら俺の条件を飲んでもらう！それでいいなら始めよう」

無謀。

それが私が思った感想だ『永久(とわ)の魔女』と呼ばれる、私の主ブラ

ン様に戦いを挑むことがどれだけ無謀か、そしてその従者たる私にも負けは許されない。

たかが悪魔なんぞに負けるつもりなぞさらさら無い、ただ目の前に現れる主の敵を倒すそれだけ、それこそが私の存在理由だから。

だが私は気付いていなかったイヤ気付こうとしなかった、それが私の逃げだということに。

決断！今、過去、未来、そして定め・・・・（後書き）

バトル1（前書き）

どうも今回はバトルです。

ではーーーーーーーーーーーー本編どうぞ

バトル1

Ｓｉｄｅ零時

「分かった。俺はお前達を殺そう。ただ！一つ条件がある俺達と戦ええそこで俺達が負けたならお前達の言い分を聞きお前達を殺す。だが！俺達が勝ったなら俺の条件を飲んでもらう！それでいいなら始めよう」

そんな俺の言葉から始まった戦い。

「行きます零時様」

向こうのナースの人も準備がいいみたいだしな。

俺が出した条件にブランは頷き一つだけ条件を出した

「私の従者に勝てそして、勝てれば私、自ら戦おう」

と言った。

所詮こちらから提案したんだ文句を言えない、俺は承諾しナース服の彼女に向く。

「そういえば君の名前は？ブランも君の事をずっと従者としか呼んでいないし？」

俺の質問に興味がないように彼女はつまらなさそうに返す。

「名前などとうの昔に捨てました私はブラン様のための道具それだけそれ以下でもそれ以上でもありません」

「分かった、それじゃあ戦おうか？」

そう俺が言った瞬間周りに魔法陣が現れる、何だこれ？

「戦って私の城が粉々になるのはごめんなのでな結界を張らせて貰った」

ああなるほどね。

「別にかまわないさそれじゃあ始めよう」

「主がんばってください」「勝つと信じておるぞ主」

そう言って応援する二人を背に俺は戦いを始めた。

ＳｉｄｅＯｕｔ

Ｓｉｄｅ三人称

先制攻撃を仕掛けたのは以外にもナースだった。

『永久（とわ）の魔女』の従者だけあり彼女の戦闘技術はかなりのものだった。

シュ　シュ

風を切る音とともに拳が零時に迫る、だが零時はあせることなく手の甲でそれを逸らしすかさず懐に入り蹴りを喰らわせる。

ドガ！！

普通の蹴りでは出ないような音とともにナースが結界の壁まで吹き飛ばされ結界に叩きつけられる。

「すごい」

「（ギリ）」

「・・・・」

今の光景を見て夜は驚き、ブランは歯軋りをし、彩は当然の用に見ている。

「くっ！」

結界の壁に叩きつけられたナースは苦虫をかむような表情をし零時を睨む、だが零時は先ほどと変わりなく淡々とナースを見ているだけだった。

彼女のことを言うなら油断の一言だろう。『永久（とわ）の魔女』と呼ばれるほどの者に従者として存在しており彼女からさまざまな知識を貰った故の油断。

「どうやらあなたを見くびっていたようです本気で行きます」

高らかに宣言すると懐に隠し持っていたナイフを一振り取り出した。

零時も何か仕掛けてくると思い少しだけ警戒する。だがナースは意外な行動をとる。

ザシュ――――――――

「なっ！」

零時が驚く、それも無理はないだろう零時の従者も今の光景に驚いている、驚いていないのは、彼女の主であるブランだろう。ブランもブランで悪ガキの様な笑みを浮かべ零時と自分の従者を見ている。

ナース。彼女がとった行動それはナイフで自らの手首をかなり深く切った、切り口からは赤い血が大量に流れている。

ナースはおもむろに血が出ているほうの手首を零時に向け勢いよく振る。

「な！」

そんな零時の驚きの声とともにナースの手首から血がすさまじい

勢いで零時に迫った。

零時バックステップで避ける。元零時がいたところを見ると、床が綺麗に真っ二つに割れていた。

「ははは。すごいなそれが君の神器（セイクリッド・ギア）の能力か？」

「いいえ私は神器（セイクリッド・ギア）を所持していませんこれは人造人間になったため我が主ブラン様からいただけた力です。私は『生きた死体』ですから、死にませんそれを利用しブラン様が私にこの『悪魔（デモン）の心臓（ハート）』と言う術式を施しました、能力はいたって簡単、自らの血を媒介としそれを武器として固めたりさっきのように勢いよく出すことが出来る用になり無限に血液を生み出す力です、最も死んだ実ですから魔法や気などは使えません」

「いいのか？そんな簡単に自分の力を教えて？」

「問題ありません。所詮勝つのは私ですから」

その言葉に驕りは無く真直ぐと零時を見ていた。

「それに茶番はやめましょう。私も主もあなたの能力で殺せるとは、思っていませんこれはただの暇つぶしです」

ブチ！

その瞬間零時の抑えていたリミッターが外れた。

「ははははははははははははははははははは！！！！！！！！！！」

壊れたおもちゃのように高らかに笑いだす零時、その笑みには怒気が含まれている。

「ふざけるなよ屑共！！」

ゴッ！！

そういった瞬間零時を中心に強力な魔力が発生したそれも魔王や神やすやすと超える魔力が発生した。

「ブレイブルー起動―――」

バトル2（前書き）

少しシリアスになりました、そして再度神登場！！

なんか主人公が全然最強をアピールできないです！！！

さーそんなこんなで本編えええええええええええーーーーーーー！

バトル2

Ｓｉｄｅなぞのナース？

理不尽その一言だった。暴力的なまでの強大な量の魔力。

既に魔力だけで視認が出来るほどだ。

「ブレイブルー起動――――」

そう言いながら彼は右手の皮手袋を外した。外した手の甲には鈍く光る黒い文様が姿を現した。

そしてさっきまで出ていた強大な魔力が右手に集まり始め禍々しいほどの異形な黒い右手になった。

彼の姿にも変化が現れ髪は透き通るほどの真っ白な白髪になった。

「俺は何もしたくない」

何の力も入ってい無い声で言う

「ただ平和に、幸せに行きたいだけだ」

濁った瞳で

「誰も傷つけず、誰にも傷つけられずただ変わらずにいたい」

一切の感情も無く

「だから、お前の全てを喰らおう怒りも、悲しみも、絶望も、憎しみも、愛も、喜びも、思いもそして俺の望みを叶えよう」

ただこの世全てに絶望したような顔で――――――――――――――――

彼は言う

ＳｉｄｅＯｕｔ

Ｓｉｄｅ彩

「なんだあの主の姿わ？」

隣で夜(よる)が驚いていいますが気にしません。

しかし

「ああなってしまいましたか」

誰に聞かれるでなく小さく呟く。

我が主は、創造神に記憶を消されたと思っていますが、そうではありません、正式には記憶を封印されただけです。

記憶とは人が生きていく中で自分と言う固体を形成するものです。記憶を消してしまうとそれに乗ずる感情、思いも一緒に消えまてしまいます。

そのため主には記憶を消したと嘘をついたのでしょうね。

ですがそれが仇となりましたね、怒り、感情の激流によって記憶にの封が解かれたみたいですし。最もこの後どうなるか私には分かりませんが主を信じて待つだけです。

ＳｉｄｅＯｕｔ

Ｓｉｄｅ零時

「ブレイブルー起動――――」

その後からの記憶が無い。今はただ真っ黒い部屋にいる。

昔の記憶がフラッシュバックする。

護っていた、助けていた、そう思っていたのは自分のただの傲慢でしかなかった。

護った者に裏切られ、救った者に、憎まれ。

自分は何のために救った？何のために護った？

今となってはもう分からない。

だんだんと意識が薄れていくそんな中一つのことを思い出した。

笑顔

それだけだった。

たったそれだけそれだけのことだ何を考えてんだ？俺？しっかり前を向け今度こそこの手で助けるんだ。

今、自分の目の前に昔と同じように助けを求めているものがいる。

伸ばしたくても伸ばせない手で必死に訴えている。

なら俺のすることは一つ。

『ほほほ、過去を乗り越えたか。これはワシからの祝いじゃうまく使え』

そんな声とともに黒い部屋が消えた。

ＳｉｄｅＯｕｔ

Ｓｉｄｅ彩

「乗り越えましたか」

そこには先ほどのような死人のような人物ではなく強い思いを瞳に灯した主がいた。

「俺は救いたい」

思いをこめた声で言う

「ただ救いたい、それで憎まれても」

強い瞳で

「ただ笑って欲しい」

感情の篭った意思を持って。

「だから、お前の全てを救う怒りも、悲しみも、絶望も、憎しみも、愛も、喜びも、思いも全て受け入れてお前を救う」

そう言って主は、本当の自分を持ってナースと対峙した。

ＳｉｄｅＯｕｔ

Ｓｉｄｅ零時

「私を救う？ふざけるのもいい加減にしてください！！あなたに私を救えるはずが無いでしょう！！
あなたに何が出来るんですか？」

憤怒の表情で俺に問うだから俺も偽りの無い心で返す。

「俺は――――――――――――――――――――

何も出来ない――――――――

――――――――

救うもの救われるもの（前書き）

どもーーーーー

また主人公最強に出来ないーーーーー

今回血だらけーーーーーーーーこんなので大丈夫カーーーーーー？？？？？？

そんなわけで本編え

救うもの救われるもの

Ｓｉｄｅ零時

「俺は――――――――――――――――――――

何も出来ない――――――――――――――――――――」

俺の今そして過去全て見て俺が出来るうこと、そんなものは何もない。

「ふざけているんですか！！救うと自分で言いながら何も出来ないなんて、肩透かしもいいところじゃないですか！！」

そうだろ、自分でもそう思うでも、

「自分から手を伸ばそうとしない奴に俺は何も出来ない俺が出来る

ことそれは手をがんばって伸ばした奴の手を握ることと一緒に笑ってやることだけだ。
俺に君の苦悩は分からない、憎しみも、怒りも、だから俺はただ手を伸ばし続けるだけだ君がその手を握るまで」

そこまで言って俺は彼女に手を差し出す。

ＳｉｄｅＯｕｔ

Ｓｉｄｅなぞのナース

「自分から手を伸ばそうとしない奴に俺は何も出来ない俺が出来ることそれは手をがんばって伸ばした奴の手を握ることと一緒に笑ってやることだけだ。
俺に君の苦悩は分からない、憎しみも、怒りも、だから俺はただ手を伸ばし続けるだけだ君がその手を握るまで」

そう言って彼は私に手を伸ばしてきただけど・・・・・

「私は苦しんでなんていないだからあなたの手を握ることはありません」

シュ

血で作った鮮血の赤い剣を手から出し彼に人たち浴びせた。

ザシュ

嫌な音とともに彼の胸に一筋の線が入り血が出る。

「「主！」」

大量の血とともに私の足元で崩れ落ちる彼、それを心配し彼の従者が声をかける。

これで終わるそう自分の思いを悟られず追われる。

そう思い私は主の元に歩き始める

「待て」

「え！」

驚きとともに振り返る。

そこには血を流しながらも私の足を掴んでいる彼だった。

「はーはー待てよ、まだやられてねーぞ」

死にかけの声を出しながら彼は立ち上がり始めた。

碌に息も出来ず「ひゅーひゅー」と必死に息をしている音が聞こえる。

生まれたての小鹿のようにたちあがる彼。

そんな醜い姿を見たくなくて私はさらに剣を振い彼に斬撃を負わせ後ろに吹き飛ばす。

でも彼は倒れない、一歩一歩私に近づいてくる。歩きたびに彼の血が落ち床を赤くする。

何で立ち上がるの？何で笑っているの？何で歩けるの？何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で——————————————————————。

もう見たくなかった自分の罪を見ているようで。

苦しかった彼がぼろぼろになる姿が。

「もうやめて、何でそこまで私に関わろうとしている？何で助けようとするの？もう何も聞きたくない？」

そう言って力なく床に座って耳をふさごうとする。

ガッ

ふさごうとする手を掴まれた、掴む人物はここには一人しかいない。

「やっとたどり着いたぜ」

血を垂れ流しながら、子供のように笑う彼がいたそして――――――――――――

ゴッ

ＳｉｄｅＯｕｔ

Ｓｉｄｅ零時

「逃げんな！お前が何したか俺は知らないし俺はお前じゃないから何も出来ないだけどなお前の苦しみや悲しみ後悔を背負ってやれるだから、逃げるな！目を背けるな！耳をふさぐな！自分の意思で自分の思い出動けお前は今だって考えられるだろう！」

そう言って俺は、もう一度手を差し伸べた。

一瞬と永遠？（前書き）

コンチハ！！！！？

特にないので本編へーーー！

一瞬と永遠？

Ｓｉｄｅ三人称

彼女は自分に伸ばされた血だらけの手の本人を見た、ボロボロになりながらも笑いながら手を差し伸べている彼を。

「良いんですか？私を助けて？何でそんなことまでするんですか？」

彼女は躊躇いながら血だらけの少年零時に聞く、だが零時は、先ほどと変わって照れたような笑みを浮かべ。

「ただお前を救いたかったからかな」

「なっ／／／／／／／／／／」

「またですか。帰ったら覚えておいてください」

そんな彩の不気味な台詞に気付いていない零時は

「お前の名前教えてくれ、人だった頃の名前があるだろう？」

ＳｉｄｅＯｕｔ

Ｓｉｄｅなぞのナース？

「お前の名前教えてくれ、人だった頃の名前があるだろう？」

いつ以来だろう人として触れてもらうのは、そしていつ以来だろう、

人に思いを、恋をするのは。

「レイスです、これからよろしくお願いします」

そう言って彼の手を私は優しく握った

ＳｉｄｅＯｕｔ

Ｓｉｄｅ零時

「レイスです、これからよろしくお願いします」

そう言って俺の手を握るレイス。

「ああ。よろしくな」

さてこれで後はアイツだけだ。

「引きこもり後は、お前だけだ来いよ」

そう言って俺はブランを見る、ブランは苦虫をつぶしたような顔をしながら俺の顔を見ている。

かなり怒ってるなー。ま、それもそうか俺はボロボロなだけど彼女はほとんど怪我をしていないのにも関わらず俺の味方についたし、相当な怒りだろうな。

「ふ。そんな傷だらけで私と戦うのか小僧？」

うわーー

随分なめられているな。こんなの怪我のうちじゃないのに。

「別に。ま、そこで黙って見てな」

目をつぶり右手に溜まった魔力を開放する。

そうすると右手に溜まっていた魔力が俺の体の周りにまとわりつき傷をとてつもない速さで治していく。

およそ五秒それだけの時間で俺の体は元の傷のない状態に戻った。

さてブラン少し面白いものを見せてやる、しっかり目に焼き付けな！

「第６６６拘束機関関放次元干渉虚数方陣展開ブレイブルー開放」

発動キーとともに自分達を包んでいた結界が崩壊しその結界が魔力に強制的に変わり俺の右手にある紋様に取り込まれる。

「な！」

どうやらブランもかなり驚いているようだなだがこれだけで終わるわけないだろう。

さっきまでは右手に魔力をためていたが今度は違う、先ほどよりも膨大な魔力を体に取り込み、腕から肩にかけ膨大な魔力でコウティングする。肩からは剣のような鋭く尖った黒い翼が生える。

準備完了！

「行くぜ！ブラン！」

ＳｉｄｅＯｕｔ

Ｓｉｄｅブラン

「行くぜ！ブラン！」

面白いたかが悪魔がどの程度足掻けるか見てやる。

「掛かって来い小僧！お前が勝てたらお前の眷属（コマ）になってやろうではないか。

「その言葉後悔するなよ！永久（とわ）の魔女！」

「お前こそあの世で後悔するなよ！」

そう言い放ち私は持てる限りの力を持って奴と向き合う。

一瞬と永遠？（後書き）

ブレイブルーの発動は起動ではなくワザと開放言ってます。
あしからず。

決着

Ｓｉｄｅブラン

ドッ

ガッ

強大な魔法で押し切ろうとするが零時は蒼の魔道書となぞの剣を使用し私の攻撃を全て無効化している。

蒼の魔道書とやらに魔法は全て喰らわれ、剣により私のの神器の灰かぶり（シンデレラ）の効果である時間戻しも切り伏せられる。

「クッ！」

苦い表情を浮かべる私に対し零時は先ほどから余裕で私のの攻撃を片っ端から喰らう斬るしている。

永久（とわ）と呼ばれた魔女はたった一人の悪魔に

自分が馬鹿にした悪魔に一方的に攻められ続ける。

自分が生きてきた全ての力、知恵を使っても及ばぬ強大な存在。

必死に足掻く。

すると自然に顔が上気し赤くなっていく。

強く願ってしまう側に近づきたいと。

その背中を追いたいと。

だから今、私がもてる全力を出そうと。

ＳｉｄｅＯｕｔ

Ｓｉｄｅ零時

「あなたは強いだから私が持てる全てをあなたに見せます、これを

受けとめられたら私の負けです」

一か八かか。面白い！！

「いいぜ受けて立つ掛かって来い」

そう俺が言った瞬間ブランの手から強打魔力の玉が発生した。

少しやばいな、もう少し力を出すか。

俺は剣を仕舞い蒼の魔道書にありったけの魔力をそそぐ、そうすると手の甲についていた文様がだんだんと大きくなり体の右半身に大量の魔方陣が書き込まれる。

魔方陣がで終わり強大な魔力のこめられた玉を止めにいる。

すると止めた瞬間から魔力が喰われ大きかった玉は俺の体に取り込まれ消滅した。

ＳｉｄｅＯｕｔ

Ｓｉｄｅブラン

フフ、完全な敗北だな。

そんなことを思いながら私は意識が薄れていっただが自然と顔には笑みがこぼれた。

プロフィール（前書き）

新しくなりました。
顔が分からない人は検索して自分で見てねーーーー

プロフィール

名前　紅　零時　（くれない　れいじ）

種族　元人間　現悪魔

容姿　ブリーチの斬月と一護が融合したときの顔
髪の毛を腰まで伸ばしていて後ろでくくっている。

身長　１７５（通常時）

体重　平均よりやや痩せている

神器　蒼の魔道書
直死の魔眼
八握剣

能力解説

蒼の魔道書
体外にある生命力や魔力を吸収し自らの魔力に変える変換率は無限で機能を止めるまで発動され続ける、発動中は体の回りに黒いオーラが放出され腕に黒い紋様が現れ、髪も白くなる。
某対人ゲームと違い腕は義手でなく右腕に直接宿っており手の甲に小さく紋様がある。
普段は皮手袋で片手だけ隠している。

直視の魔眼
人や物の死の線が見える点は見えない。

八握剣
全てを斬るをコンセプトにしており通常時は体の中にあり、使うときになると体から出てくる本数に制限はなく魔力がなくなるまで出せる。剣の形としては細い日本刀で柄の部分が包帯で巻かれている

？？？？
神から新しく貰った能力？

禁手（バランスブレイカー）
？？？？
？？？？
？？？？
？？？？

性格　めんどくさがりや、朴念仁、気配り上手、主夫

名前　紅　彩　（くれない　さや）

容姿　かなり整っている、黒髪長髪（顔は紅の弥生）

種族　神器（モノに擬態できる）

身長　１８０

体重　秘密（本人曰く）

神器　ただ一つの記憶（オンリーメモリー）

能力解説
　この世のありとあらゆる概念を変えることができる。ただし最初から概念がないモノを変えることは出来ない。（通常時の場合）

禁手
　？？？？

性格　主命、主一筋、主の為ならなんでもする名前　夜

名前　夜

容姿　ブリーチの夜一

種族　元妖怪（鵺）現悪魔

身長　１７０

体重　５ｐｐｐｐｐｐｐｐ（事情によ削除されました）

能力　幻術

性格　義理堅い　温厚

名前　ブラン・Ｗ・ノワール

容姿　デッドエンドのコアトル

種族　魔女

身長　１９０

体重　？？？？？？？

神器　灰かぶり（シンデレラ）

能力解説

一日前に時間を戻すことが出来る。強制的に一日一回自分の時間が一日戻る。

禁手　？？？？

性格　頭脳派　戦略家　独占欲が強い

名前　レイス

容姿　ヨザカルのマリアベル

種族　元人　現人造人間

身長　１７５

体重　血で濡れて読めません

能力　ブラッティーメイク

能力解説

血を自在に操る

性格　冷静？　天然

帰ってきたーー！

Ｓｉｄｅ零時

「帰って来た！！！！！！！！」

やっとだ、やっとだやっと俺のマイハウスに帰ってきた。
思えば長かったサーゼクスに頼まれた？だまされ？妖怪と戦い、帰ろうと思ったら魔女とナース？と戦うし、だがそんなこととはもうおさらばだ、さー怠惰な生活ビバ！ニート生活を送ろう。

そうそう、そう言えば、新しい力（神器）が宿った。
それは今度の戦いに使おうと思うそして俺の愛用の銃と剣が取られた。何でかと言うと。

回想

夜「主は神器以外の武器をもっているのか？」

俺「ああ。これがそうだ」

そう言って武器を差し出す。

夜「なかなかいいものではないか。よしこれは、我が貰おう！」

俺「は！ちょまって！」

高速で走り去って行く夜。

回想終了

と。こんな感じで武器を取られた銃も同様にレイスに取られた。

ちなみにコマとしての役割はこんな感じ。

ブラン『女王（クィーン）』

レイン『騎士（ナイト）』

そしてナゼ！俺がこんな回想にふけている理由はとっても簡単！！

さー俺の視線を空から家に帰るそうすると。

跡形もなく燃えた家なんて優しいレベルじゃない。

完全消滅

家が会った所は、現在巨大なクレーターが出来ている。

そして、その周辺。

「殺せ！俺達の力を見せ付けてやれ！」

「俺達が今一度冥界を立て直すのだ」

「サーゼクスを殺せ」

おい。お前ら、俺の安眠を幸せを妨害してただで死ねると思うなよ。

後にこの戦が『竜王の逆鱗事件』として歴史に載ることになってしまうことは、まだ零時は知らない。

新たな力？

Ｓｉｄｅサーゼクス

私は今は旧魔王軍の反乱に対応を追われている。

「急げ！！なるべく敵を拡散させるな一つになるべくまとめて敵の対処をしろ！！戦えないものは救助を優先に」

急いで指示を飛ばし対応に追わせる。

ハー。こんなことなら零時を呼んでおくんだった。

まー、ないものをねだっても仕方ない今ある者で何とかしなければ。

ドーーーーーーン！！！！！！！！！！

なんだ？

とてつもない爆音が当たりに広がる敵も味方も関係なしに全員の視線が爆音のした中心地に集まる。

そこには、顔を三日月のような笑みを浮かべた私の友零時がいた。だがいつもより違和感がある、彼の回りに女性達がいるからそう感じるのかと思ったが違う違和感の正体は彼の左腕についている篭手だ。

篭手は青くとても幻想的な光を放っているがそれが酷く不気味に私には見えた。

幻想的な光が終わると零時が腕を振るう、その瞬間私の前では信じられないことが起きた。

『Ｅｘｔｉｎｃｔｉｏｎ！！』

Ｓｉｄｅ零時

『Ｅｘｔｉｎｃｔｉｏｎ！！』

機械的な音声が響くそれだけで敵を消す。これが新しく手に入れた力、蒼龍王の力。

十秒立つたびに自分が望んだものを消滅させる力、膨大な魔力を代償にするがそれでもかなり強大だそして力を発動しなければストックとして篭手を消すまで残ると言う便利な力だ。

「覚悟しろよ！！悪魔ども！！俺の生活を奪った罪を思い知れ！！」

『Ｅｘｔｉｎｃｔｉｏｎ！！』

俺の怒りに合わせたように篭手も呼応しさらに敵を消滅させる。
この力のいいところは、望んだものしか消えないことだから一度の大量殲滅しても仲間は残るって寸法だ！！

「こんなもんか！！！おい俺の家を壊しておいてこんなもんか！！！！！！！」

もはや俺の挑発に乗るものはいないそう思ったときだ。

「私が相手になろう」

そこにいたのは強大な龍だった。

龍と龍？

Ｓｉｄｅ三人称

それは、圧倒的な戦いだった。

味方も敵も関係なく戦っている二人は巻き込む。

かたや龍の篭手を使い全てを消す、方や力にモノを言わせ全てを喰らう。

「面白いじゃねーか！！お前名前は？」

「ふ。人に名前を聞くときはまず自分から名乗るものではないか？」

「それもそうだ！俺は紅零時（くれなれいじ）お前は？」

「私は、オーフィス『無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）』といえば分かるだろう？」

自己紹介、これだけならばなんでもないだろう、だが彼らは会話をしている間も周りにいる存在を消していく。

もはや二人の間に入れる存在はおらずただ圧倒的な二人に場は支配されているといっても過言ではないそこは以上。

やすやす戦っているが方や『無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）』とまで呼ばれている存

在それに比べて相手をしているのは、悪魔それも元人だというのに。

「どうだ私のものにならないか？」

「イヤだねお前が俺のものに成るなら考えてやらんでもないがな」

「それは残念だ」

演技のように酷くガッカリしたポーズを見せるオーフィスはたから見ればとてもかわいく見えるだろうがここは戦場場違いにもほどある。

「さて、私はそろそろ帰らせてもらうよ君とのバトルはなかなか楽しめた」

それだけ言い残しオーフィスを名乗るドラゴンは魔方陣を使い消え去ってしまった。

「ち！」

舌打ちをしながらもどこか満足な零時は残りの残党刈るために残りの力をつかぃ敵を殲滅して言った。

最もこの後やりすぎでサーゼクスにかなりグチを零されるのは言うまでもなかった。

「だからって！！お前の嫁のことや息子の自慢も一緒にすんなーーーーーーーーーーーーーー！！」

強引に原作突入？

Ｓｉｄｅ零時

こんにちは、あれから少したって今俺は、私立駒王学園（しりつくおうがくえん）（二年の教室）にいる。

え？何でか？

それはーまー色々とあるんだけどーーーー、一番の理由としては暴れすぎだからおとなしくしていろとのことです。

ついでにこの学園にいるリアスやリアスの眷属を影からサポートだそうだ。

絶対これが本命だろうがサーゼクス！

ま、過ぎたことをいっても仕方がないので簡単に学校について説明しよう。

この駒王学園は、数年前までは女子高らしく男よりも女のほうが人数が多く男女比は三対七と圧倒的に女子のほうが多いため発言力も女子のほうが強い傾向がある、また生徒会、風紀委員も女子がほとんどを占めているそうだ。

そのためなのかは不明だがここの男子はイケメンとイケメンでは無いものの二極に分かれている。

イケメンは女性からモテ丁重に扱われるが。イケメンでは無い男

は、そこに存在してないものとしての扱いになるとも言う、なんとも残酷な運命らしい。

ちなみに俺はイケメンじゃないほうにいる、格好は厚いめがねを掛けさらに前髪を目の少し上までおろしているから、かなりの陰キャラ？になれていると思う。

まイジメはない、それよりも俺の周りがウザイ。

「よー心の友よ。貸したＤＶＤはどうだった？エロかったろう？」

この人の机でこんなあほなことを言っている丸刈りは、松田、見た目はさわやかだがいつもエロ発言をしているヘンタイだ。これがなければ彼女が出来ると思うのは、きっと俺だけじゃないはずだ。

「ふっ・・・・・今朝は風が強かったな。おかげで朝から女子高生のパンチラが拝めたぜ」

キザ男のように格好つけているのがヘンタイその２の元浜なんでもめがねをとうして女子の体型を数値化できる特異体質と言う変体ぶり、そしてなぜかめがねをとると弱体化してしまう。

「いいもん手に入った」

松田が隠すそぶりもせず俺の机にある物を置く、置くのは当然エロ本やエロＤＶＤだ。

それを置くと当然周りの女子から悲鳴が聞こえてくるが本人達は、

「騒ぐな！これは、俺らの楽しみなんだ！ほら女子供は見るな見るな！脳内で犯すぞ」

「おおっ！なんだこの秘宝は！？」

とのたまう始末。

ん？そういえばさっきからイッセー一言もしゃべらず何か考えている。

イッセーコイツも学園で女子の要注意人物だ、なんたってこの学園に入ったのがハーレムと言うなんともあほな理由だからだ。

「なーお前ら夕麻ちゃん知らないか？」

「誰だ？」

「イッセーの妄想の彼女か？」

なるほどなイッセー違和感が分かった！コイツ悪魔になってんだ。

それにしても夕麻か・・・・彼女が堕天使か何かだろう？

しかし何でイッセーが狙われた？アザゼルだったらこんなおおぴらに動くはずはない。単独の行動か？

最もイッセーの周りにいるのが賢明だろうな。

「零時も夕麻ちゃんしらないか？」

「イヤ誰だそれ？」

「そうか・・」

悪いな今本当のことを言ってもどうにもならないからな近いうちにイッセーお前の主に会うだろうからそのとき俺もちゃんと姿を現してやるよ。

「それよりもいつまで俺の机で汚いものを出している仕舞え！！！！！！」

「いきなり怒鳴るなよ！！」

「怒鳴るなじゃねーよお前らの所為で俺までヘンタイ扱いされてんだからな！」

「そういうな俺らが相手してやらなくちゃお前一人ぼっちだったろう？」

「これならまだ一人の方がよかったはーーーーーーー！！」

そんな俺の叫びとともにチャイムが鳴った。

死にかけのイッセー

Ｓｉｄｅ零時

現在、俺はレイス（私服）と一緒に兵藤一誠ことイッセーを尾行している。（他のメンバーはおとなしく家にいます）

理由は至って簡単だ。

アイツが悪魔に転生して間もないのだろう。自分の主を知らない。これは、転生悪魔にとって圧倒的なデメリットだ。

悪魔、堕天使、天使これらには暗黙の領域やルールが存在しているそのためお互いが不干渉だ、ただしはぐれ悪魔などは、関係なく全ての敵となる。

そうならない為眷属は、身元証明の代わりとして自らの主の名を言い、はぐれでないことや、ここの領地のものだと証明する。

だがもし何も知らない状況で堕天使や天使、に出くわしたらどうなる、答えは簡単！！

そく、抹殺！！！！！！となる。

そして今、イッセーは公園にて、まさに抹殺といった、状況だ。

「零時様、同じ悪魔として助けますか？」

「そうだなレイスもう少し様子を見よう、こちらもまだこの地にいる先輩に挨拶する気はないからばれたら面倒だろう」

「そうですが、いいのですか？お友達を見捨てて？」

「ま、この程度で死ねばその程度だったてことだ、でもな、俺はアイツには何かあると思うんだ。俺の蒼龍王の篭手が叫んでんだアイツには何かあるってな」

なんて少し格好をつけて言ってみる俺。

「ですがその彼は虫の息ですよ」

え？マジ

レイスに言われた通りイッセーは虫の息で今堕天使がとどめを刺そうとしているときだった。

「行くぞ！！レイス！ここでアイツに死なれたら俺の寝覚めが悪いからな」

そういい俺は右腕に宿っている蒼の魔道書の力を解放する。

「ブレイブルー起動！！」

その声とともに俺は死にかけのイッセーの元に走った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9892w/

ハイスクールD×D平和を望む少年

2011年11月17日16時38分発行